特集

7戸に1戸 空き

中野区長と公開意見交換

法学部2年

鹿倉（かくら） 佑太（ゆうた）さん

全国で空き家の数と全住宅に占める割合が過去最高になった。近所の7戸に1戸はだれも住んでいないとのデータに驚く。放置された空き家は倒壊の恐れがあり、不審者が侵入する恐れなど問題は山積みだ。高齢化が進む社会が抱える大問題に、学生視線で取り組んでいるのが中央大学法学部2年の鹿倉佑太さん。学生記者がインタビューした。

鹿倉さんが調べていくうちに分かった、驚愕の空き家の実態―。総務省が7月末に発表した2013年の「住宅・土地統計調査」によると、全国の空き家は820万戸で過去最高となった。これにはマンションなど共同住宅の1室も含まれる。総住宅数に占める空き家の割合も過去最高で13.5%。7戸に1戸はだれも住んでいない。

空き家には難問が山積している。管理者がいない古い空き家には、台風や地震などで倒壊する危険性が出てくる。空き家だと分かると不審者が潜む恐れ、不法投棄、果ては放火の対象になってしまう。長い間の放置では蚊やゴキブリ、ネズミなど害虫・害獣が近隣住民に迷惑をかけ、伸び放題の植木が通行人や交通の妨げにもなる。

高齢化が進み、少子化傾向にある現代社会で空き家は増加の一途。取り壊すなど対策を講じようとしても、持ち主が分からずに手詰まりとなる。自治体が持ち主の許可を得ずに解体することは難しく、いつしか時間だけが流れていく。

所有者が分かっていても、空き家を更地にすれば固定資産税が最大で6倍になってしまう。負担増を嫌ってそのままにしている人が多いという。

スタートはゆるキャラ!?

鹿倉さんは「ごく普通の学生です。水泳やスキューバダイビングをよくしています」と話す。空き家対策の活動は友人に誘われて入った学生団体「日本学生会議所」（一般社団法人）が端緒だった。議員のインターンの仲介などをするところで、自ら昨

家対策に取り組む

公開討論会で鹿倉さん（左から2人目）がマイクを握る

年の夏休みに国会議員の事務所に入り、インターンを通して政治の世界に初めて触れた。

そしてまたしても会議所の先輩の紹介で、今回の活動母体となる「中野区学生議会」入りする。きっかけは中野区に住んでいたから。「ごく普通の学生」が友人関係によって、のちに大問題に取り組むことになる。

中野区学生議会とは、若者と政治をつなぐNPO法人「Youth Create」（ユースクリエイト、代表・原田謙介氏）の活動の一つ。JR中野駅周辺には早大、明大、帝京平成大の3校が集まる。

同議会の趣旨は「学生街として今後発展していく中野の未来を、学生自身が考え、『まちづくりプラン』を作成する政策コンテストを実施する」というものだ。〈次回は来年2月開催予定〉

そのコンテストはことし初めて開催され、18チームが参加した。優勝チームは中野区長選公開討論会に参加できる。立候補予定者による公開討論会は告示2日前に行われ、激しい政策論戦にまじって、学生グループが考えた政策を提案するのである。

鹿倉さんは成蹊大生3人とチームを組んだ。「中野に住んでいるのが僕だけだったので」リーダーとなる。チームのコンセプトは「選ばれる街」。当初は「新たな中野区のゆるキャラ制定」を考えた。くまモン（熊本）など全国的ブームのゆるキャラに刺激された。同時に、中野区内にある駅、西武新宿線都立家政駅から「かせいチャン」と名付けたられた従来のキャラクターをもっと盛り上げようとした。

熟慮の末、「防災に強い街へ」に方向転換。コンセプトの「選ばれる街」とは、住みたい場所だと思うか

特集 7戸に1戸 空き家対策に取り組む 中野区長と公開意見交換

ら。しかし、方向性が定まらずにこれも頓挫した。木造住宅密集地域が抱える問題などを検討し、試行錯誤のなかから空き家対策をテーマとした。

管理不全と有効利用について、4月22日の最終報告会で発表した。コンテストに参加を決めてから約2カ月が経過していた。

18チームによるコンテスト結果は投票で決まる。「わずか1票差で僕らが優勝してしまって、頭が真っ白になりました」と鹿倉さん。前夜はメンバー4人が集まり、パワーポイントなど資料を丹念に整理した。「終わったのは朝刊が届けられたころでしたね」と振り返る。無我夢中で挑み、栄冠を得た。

これで終わったわけではない。中野区長選・公開討論会参加が待っている。学生が区長候補者に自らの政策を提案するのは異例のことだ。他の17チームや広く学生代表としての立場を考えると恥ずかしいことはできない。背筋が伸びた。顔つきが変わった。公開討論会の5月30日まで、およそ1カ月間、全速力の日々だった。

自転車で実態調査

4人で空き家の実態を調べた。中野区内を自転車で回り、空き家を見つけては写真を撮った。空き家の隣家に事情を話し、実態調査を重ねた。「お隣の家にあげていただき、2階の窓を開けたら空き家に生い茂るツタがこちらに入ってきて。これじゃ窓は開けられないと思った。リアルな問題として、空き家対策を考えるようになりましたね」

公開討論会でフリップを説明

次は中野区へ情報公開請求だ。空き家が原因の苦情の件数。迷惑空き家に対して「勧告」がなされた事例などを質問した。苦情件数についての明確な回答はなかった。「請求してから14日以内に返答される決まりですが、勧告がなされた事例の回答連絡がきたのは最終日となる14日目の午後4時50分。すぐに電話しました。でも5時になってしまい、『きょうの業務は終わりました』のコール。その後話し合っても、納得できるデータは得られませんでした」。情報公開請求をしたことで、中野区がまとまった取り組みをしていない現状を知った。行政の一端を学んだ。

こうしている間も調査は続けていた。空き家対策で先行していると聞いた神奈川県横須賀市役所へ出掛けた。県立保健福祉大学と共同して、高台に住む高齢者の生活支援を始めていた。高台と複雑な地形のため、車を家に横付けできない。買い物や通院など生活に支障をきたし、空き家が増えてきたという地域だ。学生が高齢者を援助し、学生は市から家賃補助を受ける。人と人との新たな交わりの始まりだ。

次に鹿倉さんたちは、空き家対策に取り組む地方議員を訪ねた。世田谷区で精力的に空き家問題に取り組む世田谷区議の末岡雅之氏（中央大学法科大学院修了）。集めた

チームのメンバー。右から2人目が鹿倉さん

鹿倉さんらがフィールドワークで見つけた空き家（写真右も）

資料や写真などを見てもらうと「甘い！公開討論会の相手は行政のプロだ。これじゃ太刀打ちできないとビシバシやられて。まるで熱血教師のようでした」

末岡先生から空き家に関する詳細な情報を提供された。「これが中野区とリンクするところが多くて参考になりました」。次に中野区で空き家対策をテーマとする佐野礼治区議を訪ね、最新の実態を学んだ。

いよいよ公開討論会の5月30日を迎える。中野駅前に特設会場が設けられた。夜間の照明を受けて、ひな壇に上がる。手づくりのフリップを後方に貼りだし、学生が取り組んだ空き家対策を提案した。

ポイントは2つだ。

1、管理不全の空き家への対策

☆空き家の適性管理条例の制定（管理されていない空き家を区が取り壊せるように）

2、空き家の有効活用

☆中野区内の大学と連携した空き家への学生居住事業（地域コミュニティーへの貢献）

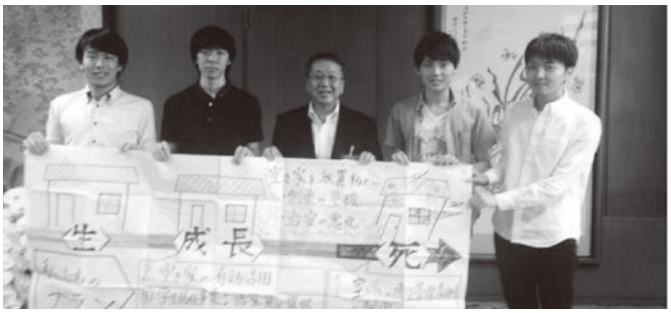
☆空き家アドバイザー制度

提案を熱心に聞いてくれたのが現区長の田中大輔氏（63）だった。中大を1977年に卒業した大先輩。「直前にいただいた資料で先輩であることを知り、びっくりしました」

意見交換の場にいたユースクリエイトの原田代表が述懐する。「意見交換はガチでした。彼が横須賀の事例を話すと、『中野の現状は?』と突っ込んでくる。ほかの質問で同席した青年会議所の方が答えようとすると、『学生に聞いている』って」

のちに区長となった田中氏は、区長室に招いた鹿倉さんらの提案に理解を示しながらも、区が事業として扱う空き家対策物件と業者が通常扱う不動産物件との違いなど、起こりうる問題を提起した。そして後に「空き家の諸問題を検討していくなかで、学生の声も参考にする」と発言した。

学生が政治に参加した。若者の声が区政を動かす。社会を考え、よりよい暮らしとなるための一翼を担った。鹿倉さんはゆるキャラが好きな、ごく普通の学生だった。



中野区長（中央）と

■「中野区学生議会」の流れ

▽2月17日	**キックオフ** 基調講演、各チームが編成。鹿倉さんらはチーム名を「Develop“men’s”」とする。コンセプトなど打合せ。
▽3月	**フィールドワーク** 3回開催し、中野で活動する人々の声を聴く。
▽3月24日	**中間報告会**
▽4月22日	**最終報告会**
▽5月30日	**公開討論会**

◆取材を終えて―①

空き家宿泊経験あります

学生記者　伊坂理花（法学部4年）

「容姿端麗で頭脳明晰」鹿倉さんは、なんとも出来過ぎた人である。インタビュー中も爽やかな笑顔を絶やすことなく、こちら側への配慮がキラリと光るまさに絵に描いたような好青年であった。

彼を取材した毎日新聞やNHKの記者が肯定的な記事を書き、番組を作ったのにも納得がいく。「空き家問題」という重い問題を軸に今回のインタビューは行われたが、彼の人柄の良さか、その雰囲気は始終和やかなものであった。

「学生×空き家問題」―その意外性に、当誌はもちろんのこと、各メディアが鹿倉さんに視線を注ぐ理由がある。というのも、空き家問題は少子高齢化や過疎化と並び、日本にとって喫緊の課題であるにもかかわらず、認知が進まない現状がある。ましてや政治に関心の薄いといわれる今日の学生にとっては、馴染みのない問題であろう。恥ずかしながら私自身も例外ではなく、やはり彼の取り組みは新鮮な響きを帯びていた。

突き破る壁 跳ね返される壁

一方で、今やNPO・ベンチャー企業といったさまざまな団体が空き家問題に真剣に取り組んでいるのもまた事実である。

鹿倉さんらが行政と懸命に対峙し、収集した資料に対して、協力を仰いだ世田谷区議が「甘い。これではプロに太刀打ちできない」と一喝したことを鑑みれば、行政の厚い壁をなかなか壊すことができない難しさに直面しているのではないかという思いに駆られる。

学生記者・伊坂

その点、世田谷区議をはじめ、横須賀市役所の支援も得て作成した良質な資料を手に、鹿倉さんが中野区長に直接、空き家対策について提言した意義はやはり大きい。

その提言内容の中には「空き家を学生に貸し出す」という学生独自の視点が光るものもあり、やはり耳目を集めたのである。

体調不良

ところで、このインタビュー中、失念していたことが1つあった。法学部ゼミの一環として、総務省主催の企画で石川県能登町を訪れた大学3年生当時、なんと私は空き家に宿泊したことがあったのだ。

助成金補助やらの大人の事情があってのことだったのだが、その記憶は失念していた割に実に強烈なものである。

部屋に入ると慣れない異臭がする。畳は剥がれているから、足元をずっと注意している。壁には、この家の住民の先祖とおぼしき人物の写真やその人の表彰状が掛けてあり、異様な雰囲気を漂わせている。

夏真っ盛りであるが冷房はない。窓は閉まらず、虫が出たり入ったりする。変わった虫に刺され急きょ帰宅することになった者、眠りにつけず体調不良に陥る者がでるなど、てんやわんやであった。

私はというと、案外平気であったというのが正直な感想であるが、この話には続きがある。

行政の関わる企画で関東から出向いた学生を粗悪な空き家に泊まらせるとは学習妨害も甚だしいと教授会で議論になったのだ。この企画に参加した他大学の学生たちも空き家で一夜を過ごし、散々な目にあったというのだ。たかが一泊、されど一泊。少なくともその場にいた多くの学生た

鹿倉さんを取材する3人の学生記者

ちは、空き家での生活に我慢がならなかった。

そこで思い出されるのが、鹿倉さんの提案だ。「学生に空き家を貸し出す」…。中野区長はこれに対して「学生の利益誘導ではないか。学生が卒業と同時に空き家を出て行ってしまえば、区としてのメリットがあるのか」と指摘したというが、区の利害問題はさておき、あの一件を思い出すと、そもそも空き家に住むのは無理な気がするのである。

確かに横須賀市が実際に学生への空き家提供に成功しているという話もあるが、今後空き家問題はますます加速する一方で子供の母体数が減ることを考えれば、根本的に有効的な解決策とは言い難いのかもしれない。

鹿倉さんの功績をけなすつもりは学生記者には毛頭ないが、その点を彼に追究すべきだったかもしれない。

学生独自の視点で空き家問題解決の糸口を探すのは容易なことではないだろう。単に厳密な意味で学生視線の延長線上にある空き家問題の解決方法を模索しなくても、学生らしさは出すことができると私は考える。それは、特定の団体の利益を代表しない学生だからこそ提案できる「官民の見境ない、横断的な解決策」である。

例えば、こういうのはどうだろうか。民間の保険会社に空き家問題解決に一役買ってもらうよう、行政に働きかけるという案だ。

空き家は放火を誘発するのは言うまでもないが、そのとき家主が空き家に火災保険をかけていた場合、火災に伴う家主への保険金支払いの義務が保険会社には基本的に生じる。さらには空き家への放火の場合、発見が遅れて周囲の住宅にも被害が及ぶ可能性が多分にあることから、損害額は高額に及ぶことは想像に難くない。

すなわち、保険会社にとって増加の一途を辿る空き家問題は看過しがたいはずである。この点に行政が注目することで、官民一体で空き家管理を進めるような案も、偏りなき学生独自の視点だからこそ生まれるものではないだろうか。

そういえば、鹿倉さんは中野区長へ提言する解決案を練っている際、先述した世田谷区議に「甘い」という言葉とともにこうも言われたという。「条例案をもっと詰めろ」と。この言葉はもっともであるが、学生らしくあえて違う土俵で戦ってもよいのではないか。

鹿倉さんは中野区長選での公開討論会を終えた今、今後どのように空き家問題に関わっていくかは未定だという。

今後、中野区における空き家問題の行く末は区長の手腕に委ねられるところが大きいであろう。だが、2年先輩の先輩風を吹かせば、また別の学生視点で鹿倉さんが考え得る提言はまだまだあるのではと思った次第である。

◆取材を終えて―②

行政との話し合い 私たちも飯田市でゼミ体験

学生記者　野村睦（法学部2年）

鹿倉さんは私と同じ学生でありながら、学生が取り上げ、考えるにはとても難しい社会問題「空き家対策」について、実際に自らの足を運び、調査を進めていった。

空き家問題は身近な問題であるが、現在の行政ではなかなか解決し得ない複雑な難問をはらむ。このことを認識している学生はどのくらいいるだろうか。

きっかけは何であれ、まずは問題として認識すること、知ることから空き家問題の解決は始まる、と鹿倉さんは述べていた。

鹿倉さんが空き家問題を考えるきっかけとなったのは、大学生による政策コンテストに出場する際、自ら住む中野区の諸問題について調査したからである。

政策コンテストで見事優勝を果たし、優勝チームに与えられる中野区長選候補者との公開討論会に参加が決定。以来、学業と並行しながら積極的に中野区と横須賀市の現状を調べた。

空き家の実態調査では、近隣住民への訪問調査を通じて、問題の実態に迫るとともに理解を深めていった。その甲斐もあり、公開討論会では学生ならではの鋭い視点から、空き家に関する問題提起、また政策提言を展開した。

学生記者・野村

鹿倉さんの調査、提言の綿密さは中野区長をも動かすほどで、さらなる政策の変更、調査を区長から求められ、検討を施すこととなったのである。

知ることから始めよう

学生という立場から、行政に対して政策提言することの難しさ、またその政策を実際の行政の取り組みに組み込んでもらうことの難しさは、私自身、別件にはなるが長野県飯田市へ政策提言をするというゼミ活動の中で感じている。

飯田市は他地域に先駆けて、総合型地域スポーツクラブといった多世代・多種目・多志向を掲げた住民主導による地域住民のコミュニティーネットワークづくりを進めてきた。

しかし当初の目標モデルと実態との間に大きなズレが生じた。問題となったのは、周知度が低いためか、総合型地域スポーツクラブの新規加入者が増えない。学校のクラブ活動や地域少年団によるクラブ活動、公民館での地域活動などとは異なった独自の長所を展開していくことができないでいた。

総合型地域スポーツクラブが上手く住民のコミュニティー形成の場として生かされているとは言えないのが実情だった。

行政に、この状態を改善しようとする動きはみられず、総合型地域スポーツクラブの多くは名ばかりの状態が進行しつつある。

ゼミは私たち学生が、飯田市役所体育課や飯田市の公民館、総合型地域スポーツクラブの一つである南信州クラブなどを訪れて、現状の活動調査を行い、飯田市に対して政策提言を行うといったものである。

具体的には、飯田市で地域住民に根付いている公民館活動の参加者を総合型地域スポーツクラブに呼び込みながら、両者ともに新規加入者の受け入れ体制を整えることを提案した。

行政には活動施設や指導者などの確保、広報・財源などの支援を求

めるとともに、公民館や総合型地域スポーツクラブをはじめとする地域住民活動を展開する組織の話し合いや情報共有のできる場の提供を求めるといったことを提言にまとめた。

政策提言といえば聞こえは良いが、地域住民の生活について常日ごろ考え、多くの政策を施している行政や活動を展開する組織に対して、一学生が提言することなど財源や住民の意思を無視した単なる理想に過ぎないと捉えられてしまうのではないかと感じずにはいられなかった。

鹿倉さんらの活動は、私たちと同じ学生でありながら、中野区長ら行政に影響を及ぼすまでに発展した。

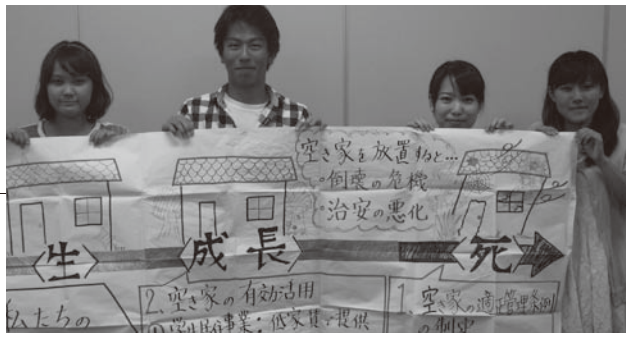
彼らの政策提言は綿密だ。私は調査の重要性、意義の高さを改めて感じた。忙しい学生生活の中でも、粘り強く何度も調査を重ねた。学生という立場を生かし、学生ならではの視点から問題にアプローチするといった機転の良さにも感心させられた。

これを機に多くの学生が空き家問題について、まずは知ることから始め、知ることによって興味や関心が高まる。社会問題に関して自分の思考を持つきっかけになれば、大きな意義の一つになるだろう。

◆取材を終えて―③

私たちもまさに今

学生記者　高瀬杏菜（法学部2年）



最後に記念撮影。全員でフリップを持つ

空き家対策という言葉を見て、直感が働いた。

折しも長野県木曽町で「木曽メディア塾」（記事別掲）に参加していたときだ。木曽メディア塾とはマスコミ志望の学生・大学院生らによる私塾であり、3泊4日の日程で合宿した。私たちの班のテーマがまさに空き家問題。渦中で鹿倉さんの存在を知った。

私の班はある壁にぶつかっていた。

「空き家問題はすぐにどうこうという問題ではない」という住民の意識。問題解決以前に、問題意識を持ってもらうことのほうが先ではないのか。早急に解決するべき問題が他にあるのではないか。

学生記者・高瀬

参考になる政策提言をして帰りたいという最初の意気込みとは程遠い感情が私の中で渦巻いていた。

鹿倉さんのチームがなぜ数多いトピックのなかから空き家問題を取り上げたのか、知りたかった。「世田谷区議の先生から、空き家問題がいかに危険かと言われて。それがきっかけです」と鹿倉さん。空き家問題は大きな社会問題なのに知られていなかった。世間に伝えたいと取り組んだという。

この考えに共感した。問題を問題としない空気の下で、どれほどいい解決策を提示しても成功しないだろう。そんな矛盾がこの問題の一番の問題だと実感した。

空き家対策の基本法を国は立法できていない現状が問題である。そのため地方自治体は動きにくいかもしれない。

でも、それなら誰が動くのか。やはり行政であろう。ひと口に「行政」とくくるが、全ての地域で同じ対応をすれば問題解決につながるとは限らない。地域に根ざした地方自治体が活躍するだろう。

これまで全く知りもしなかった空き家問題が、日本全体を取り巻く大問題であることを実感した。それは紛れもなく地方から少しずつ日本をむしばむ、いわば害虫である。しかし、駆除は一筋縄ではいかない。解決策（＝殺虫剤）は、人にも害を加えうる。だからこそ、素早い対応ができていないのではないだろうか。そんなことを考えた鹿倉さんへのインタビュー、1時間半だった。

害虫駆除の一翼を鹿倉さんたちのチームが担っているのであろう。

同じ年代の活躍を眩しくも感じた。

空き家対策 私たちも

提言 サマースクールに活用しよう

学生記者・高瀬杏菜（法2）が参加した木曽メディア塾では、各班の活動報告をプレゼンテーションで展開した。以下はその発表の再現である。

皆さん、こんにちは。

A班のプレゼンターを務めさせていただく中央大学2年の高瀬杏菜です。A班は空き家の活用という観点から提言します。

全国の空き家件数が過去最高になったことをご存知でしょうか？家屋の13％にもあたる820万戸が空き家になっているのです！

ここ長野県は全国でも空き家率が高く、最多である山梨県の22％に次ぐ、19.8％となっています（数字は平成25年の速報値）。

では、なぜ空き家が問題になっているのでしょうか？理由として、放火や倒壊、公衆衛生、景観を乱す、不審者の侵入などが挙げられます。

具体例を見ていきましょう！

放火では、ことし7月末に徳島県吉野川市で小学生が空き家に侵入し、マッチで放火するという事案が発生しました。

2011年冬には、青森・津軽周辺で170軒を超える空き家が豪雪により倒壊しました。この事案では近隣住居も被害に遭いました。空き家を放置してはいけないということが、少しはお分かりいただけたでしょうか？

木曽町を見て回った中で、二つの問題点に気付きました。

一つ目、寒さが厳しく、仕事が少ないことにより、木曽に人があまり来ない。

二つ目、人が来ても、空き家には入居できない。

問題点を少しでも解決すべく、私たちは今までスポットを当ててこられなかった空き家を「サマースクール」の拠点として活用することを提言します。

木曽メディア塾として、現場取材をするメンバー。左端が筆者

空き家×教育をコンセプトに、木曽を「教育の町」として発展させることを考えました。

『環境教育』を導入します。環境教育とは「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と定義づけられています。

環境問題に対する日本人の意識の薄さは、これまで指摘されてきました。次世代を担う子供たちに、早い時期から体験を通じた環境問題を感じてもらおうという狙いがあります。

子供たちに体験をしてもらうため、子供が興味を持つ魅力的な様々なプログラムを作ることが求められます。多くの子供たちが、楽しそうだな、と思うサマースクールをつくるのです。

皆さんが抱く最大の疑問に答えたいと思います。なぜ木曽を選んだか。理由は明確です。学生側、町側、双方にメリットがあるからです。

学生のメリットは、豊かな自然のなかに様々な地域の学生が集まることで想いを共有できる。木曽町には知名度向上や経済の活性化、Iターン・Uターン希望者の開拓など数々のメリットが考えられます。

本当に実現することができるの？そんな声が聞こえてきそうです。

しかしご安心を。能登インターン（就業体験）や小布施×サマースクールでの成功例があります。

取材をして分かったのは、町民が「空き家を特に不便だとは感じていない」ととらえ、行政も「空き家問題は今すぐ、どうこうというものではない」と受け止めていたことです。ここに空き家問題の解決の難しさがあるのかと思いました。

空き家を楽しく有効活用することが、地域を活性化することにもつながると思います。

改めて私たちA班は、空き家をサマースクールの拠点として活用することを提言します。

ご清聴、ありがとうございました。

中大生で、中央大学の「C」マークをつくった。
右端が筆者